

教育者としての「使命感」・「人間愛」・「創造力」を有する教員の養成を目指す

2011
秋
No.20

JUEN

【ジュエン】
Joetsu University of Education, Network

上越教育大学
Joetsu University of Education
学園だより

特集 小学校で自信をもって 観察・実験指導ができる 教員の養成



インタビュー 免Pで輝く人

大学院3年
特別支援教育コース
舟山 友浩さん

大学院進学のかきつけ

私は、新潟医療福祉大学で言語障害のある子どもの訓練・指導について学び、言語聴覚士の国家資格を取得しました。そこで学んだことを、以前から興味があった教育の分野で活かしたいと考えるようになり、免P制度のある上越教育大学の大学院への進学を決めました。

上越での学び

学部時代に学んだことを教育の場でそのまま行えばよいと考えていた私にとって、大学院生活は、カルチャーショックからの始まりでした。入学当初から、教育と医療の違いについて模索し、葛藤する日々を送っていました。

しかし、講義やゼミでの討論、臨床実習などさまざまな経験の中で、教育で行うべきことは何かを感じ取ることができるようになってきました。それは、特別支援教育の理念の中心となる「自立活動」の考え方を少しずつ理解できるようになったからなのだと思います。このような過程で、「教育とは?」「教師の専門性とは?」という問いを追求するようになり、修士論文では、「言語通級担当教師の研修体制と専門的力量形成に関する研究」をテーマに取り組んでいます。今では、大学院での学びが、自分にとっての大きな転機になっていると感じています。

残りの大学院生活でも、セミナー担当の先生をはじめとする専門家の先生

方、共に学ぶ大学院生、そして、臨床実習でかかわらせていただいているお子さんや保護者の方からたくさんのご意見をいただいています。もちろん、修了後もこの出会いを大切にしていきたいです。

目指す教師像

私の目指す教師像は“学び続ける教師”です。子どもへのかかわりを振り返ったり、先輩や同僚の助言を得たりして学んでいくことで、新たな視点に気づき、よりよい実践につながっていくと考えます。子どもの幸せを願いながら、自分の指導をオープンにして学び続けていきたいです。

インタビューを終えて

舟山さんは、優しい物腰と穏やかな語りをされる方ですが、よく話してみると、芯のしっかりとした日本男児です。野球の腕前は、毎年行われる学内のソフトボール大会で実証済み。でも、なによりも特記すべきは、己の研究に対する取り組み方です。その姿勢は、特別支援教育コースの院生の中でもピカイチではないでしょうか?これからの特別支援教育の中で、言語聴覚士という医療側の専門家として、また、特別支援教育の養成教育を受けてきた教育の専門家として、素晴らしい実践をしてくれる方だと期待しています。

■聞き手・文(写真左より)
大学院2年 特別支援教育コース 石井 尚美 (本人)
大学院3年 特別支援教育コース 大竹 達也



免P = 教育職員免許 取得プログラム

本学大学院修士課程の入学者で、教員免許の取得を希望する人を対象として、長期履修学生制度を利用し、3年間で大学院の教育課程と学部の教員養成カリキュラムの単位を修得することにより、教員免許状取得の資格を得ることができるプログラムです。

JUEN 上越教育大学学園だより
2011 秋 No.20

国立大学法人
上越教育大学
Joetsu University of Education
<http://www.juen.ac.jp/>

編集・発行
上越教育大学情報・広報委員会

デザイン・監修
安部 泰(芸術・体育教育学系 講師)

制作
株式会社 桐朋

お問い合わせ先

上越教育大学総務部広報室
〒943-8512
新潟県上越市山屋敷町1
TEL 025-521-3626 FAX 025-521-3627
E-mail kouhou@juen.ac.jp(ご意見をお寄せ下さい。)

リサイクル適性
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。

※本誌掲載の文書・記事・写真等の無断転載はお断りします。

サッカーの本質や精神です。

学生たちに学んでほしいのは



研究室

よむこころ

研究と教育

今年7月、なでしこジャパンがサッカー女子ワールドカップで優勝しました。ところで、澤選手が延長戦でコーナーキックから同点となるボレーシュートを決めたのは、相手ゴールですか、それとも味方ゴールですか。競技規則にはコイントスに勝ったチームが「攻めるゴールを決める」としか明記されていませんが、一般的には「相手ゴール」にシュートを決めれば1点と了解されているでしょう。自陣の最後方にあつて味方ゴールキーパーがシュートを決められないように守っているのが「味方ゴール」、フォワードがシュートを決めようと攻めていくのが「相手ゴール」と考えるのが妥当です。それでは、「相手ゴール」に入れようと奪い合われ、運ばれ、シュートされるボールはどんな意味を持つことになるでしょうか。宝物ですが、爆弾ですか。中世の英国で行われていたフットボールは「味方ゴール」にボールを届けることによつてゲームが終了し、ボールはゴールを決めた人に贈られていました。ボールは、大切な物、宝物であつたと言えるでしょう。

小学校をはじめとして、学校の体育授業では

サッカーを取り扱うことができます。私の研究テーマの一つは、現在の競技サッカーそのものを教材とするのではなく、サッカーの起源や歴史の変遷を踏まえ、学校にふさわしく、子どもたちに学んでほしいサッカーの本質や精神を教材化し、それを大学の授業内容とすることです。私の授業では、まず「ボールと友だち」になる活動から始め、ゲームは仲間と協力してボールを「味方ゴール」に届けるルールで行います。つまり、「オウンゴール」のみ得点とするゲームです。これらの教材は、絶えず実践を通して面白いが、理解しやすいかなど、検証するよう心がけています。

地域貢献

地域貢献活動の一環として、競技サッカーの普及、少年少女サッカー選手の育成も行っています。大学の近隣で子どもたちのサッカー活動を行っている少年サッカーチームと連携し、山麓線サッカーリーグを運営しています。学部生や大学院生が審判や記録係として積極的に運営支援に参加できるようにし、地域と学生との接点となる活動を目指しています。また私自身も、指導や審判の資格を生かして、女子選手を対象として大学サッカー場で実技指導をしたり、各種大会に参加できるよう支援したりしています。大学の持つ資源（施設、プログラム、人材）をサッカーに傾け、サッカーの世界への扉にふれた地域の子どものために提供すること、大学及び大学教員としての使命でもあると考えています。

榊原 潔(さかきばら きよし) 芸術・体育教育学系 准教授

昭和32年7月生まれ 54歳。筑波大学体育専門学群、同大学院修士課程体育研究科修了。昭和59年4月上越教育大学に助手として着任。その後、講師、助教授を経て現在准教授。専門は、運動学、運動方法学(球技)。FC上越マスターズ40歳以上の選手としても活動している。

着々と夢に近づき、
毎日が充実しています

学校教育学部 1年
中村 樹さん



書道部の中村さん、できあがった作品の前で

上越教育大学と出会って

私は、今、着々と自分の夢に近づいています。小学校の頃、「学校の先生になりたい」と思ったのは、私だけではないと思います。特に私は、教師であつた祖父、現職の教員である父の影響もあつて、低学年のころには教師を目指していました。上越教育大学に入学してから日々教育の現場について学び、子どもたちに何を教えればいいのかを学んでいます。学びのひろばやボランティアなど、子どもと接する機会も多く、毎日が充実しています。周りの仲間、先輩も、それぞれの目標を持って、真剣に教師を目指しています。この素晴らしい環境に身を置けることは今後の人生に大きなプラスになると思います。

学びのひろばに参加して

私は、学生が企画する学びのひろばに参加しています。どうしたら地域の子どもたちは楽しんでくれるのか、この活動で子どもたちにどういった成長を期待するのか、そして、安全面ではどのような対処が必要なのか、ひと月前から多くの時間を費やして話し合い、準備をして、やっと形になります。当日は、子どもたちと時間を忘れて楽しんで、終わった後の充実感・達成感は、言いようのないものです。きっと今の私は、子どもたちの一面しか見ることができていないのだと思います。しかし、そこから多くのことに気付かされています。今後も自分の学びのためにも積極的にこの活動に参加していきたいと思っています。

今後のこと

入学してまだ半年ですが、既に本当に多くのことを体験し、自分の未熟さを痛感するとともに、学ぶことの喜びを感じています。そして、実際に子どもたちとふれあつてみて、教師も生徒もお互いに教える側であり、教えられる側であるということを知りました。このことを忘れないように、これからもがんばってまいります。



小学校で自信をもって観察・実験指導ができる 教員の養成

— 観察・実験パフォーマンス講座の取り組み —

平成22年度から文部科学省特別経費（プロジェクト分）事業を活用し、「初等教育教員養成課程における科学的リテラシーの育成—感性と科学的素養に満ちた教員の養成—」に取り組んでいます。

このプロジェクトでは、学部教育において自信をもって小学校理科の授業が行える指導技術を習得させることとしています。

この目的を達成するためのさまざまな取り組みのうち、学部3年生必修授業の教育実践科目「初等理科指導法」において授業時間外に課しているサイエンス・パフォーマンス・アドバイザーによる小学校における観察・実験の指導法の講座について紹介します。



自然・生活教育学系
教授 小林 辰至

表1
観察・実験パフォーマンス講座(全3回)

- 1回目**
 - 1 液体の加熱
100mLの水を量り取り、アルコールランプで温める。
 - 2 水溶液の性質
濃塩酸を希釈する。塩酸、食塩水、石灰水の液性をリトマス紙とBTB溶液で調べる。
 - 3 単純な回路づくり
豆電球1個、乾電池1個、導線1本で豆電球を点灯させる。
 - 4 飽和食塩水の調整と水の凝固点の測定
飽和食塩水を作る。氷に飽和食塩水を入れ、試験管中の水温変化を測定する。
 - 5 水中の微生物を顕微鏡で観察
プレパラートを作り、顕微鏡で観察する。

- 2回目**
 - 1 だ液のはたらきの調査
デンプン溶液を用いて、体温と同じ条件下で、だ液のはたらきを調べる。
 - 2 手回し発電機の操作
手回し発電機を用いコンデンサーに蓄電し、豆電球と発光ダイオードの点灯時間を比較する。
 - 3 酸素の性質
水上置換法で酸素を集気ビンに集め、線香で気体の性質を調べる。
 - 4 燃焼後の酸素濃度の調査
集気ビンの中でろうそくを燃やした後に、酸素が残っているかどうかを気体検知管で調べる。
 - 5 回路を流れる電流の大きさ
乾電池の直列・並列回路をつくり、豆電球の明るさと流れる電流の大きさを調べる。
 - 6 電熱線による発熱の比較
直径の異なる電熱線に電流を流し、発熱の違いを調べる。

- 3回目**
 - 1 金属と酸の反応
アルミニウムとスチールウールに希塩酸を注ぎ、変化を観察する。後に残った物質が金属でなくなっていることを確認する。
 - 2 光合成によるデンプンの確認
葉をエタノールで脱色するか、たき染めを行って、光合成によって何が葉に作られたかを調べる。
 - 3 地層のでき方
ペットボトル内で粒の大きさの異なるものがどのように堆積するかを観察する。
 - 4 火山岩と砂岩の観察
ルーペや双眼実体顕微鏡を用いて、火山岩や砂岩、火山灰の粒などを観察し、その特徴を記録する。
 - 5 堆積岩の選別
6つの岩石から3種の堆積岩を選び出し、名前をつける。



「観察・実験パフォーマンス講座」の意義

科学技術振興機構（JST）が平成20年に実施した全国の公立小学校の先生を対象としたアンケート調査によると、小学校の約半数の先生が理科の指導に苦手意識をもっており、7割近い先生が理科の指導法や観察・実験についての知識・技能等の低さを自認していることが明らかになりました。さらに、指導法や観察・実験について「もっと大学で学んでおいた方がよかった」と感じている先生は8割を超えていました。

本学では、学部において、自然系コース（理科）の学生だけでなく全ての学生が、理科の観察・実験を十分に体験し、自信をもって観察・実験の指導ができるように、平成22年度より「観察・実験パフォーマンス講座」を実施しています。

この講座は、サイエンス・パフォーマンス・アドバイザーとして、小・中学校で長年理科を教えてこられた理科のエキスパートの先生方を講師に迎え、1回90分間の講座を3回開講しています。1回の講座は最大10人までという少人数で行っていますので、学生全員が自ら観察・実験を体験し、理科の問題解決能力を高めることができます。また、1回の講座で5種類以上の観察・

実験が用意されており、3回すべての講座に出席すると、小学校の理科授業で取り扱う観察・実験の多くを体験することができます。

「観察・実験パフォーマンス講座」の内容

観察・実験パフォーマンス講座では、表1（上表）のような器具の操作方法や実験の方法を受講生一人ひとりが体験しながら、「小学生に効果的に教えるにはどのようにすればいいのか」を考察しています。



気体検知管



- 1 顕微鏡の操作
- 2 酸素濃度の測定
- 3 地層のでき方の観察
- 4 希塩酸とスチールウールの反応
- 5 不溶物のろ過



自然・生活教育学系
講師 稲田 結美

講座に参加してみても、どうでしたか？



学部3年 社会系コース
井上 直人 さん

私は観察・実験パフォーマンス講座を通して、なぜその実験方法なのか、なぜその観点で観察するのかなど、本質的な部分を学ぶことができました。小学生の頃は、ただ漠然と目の前にある実験をこなして、観察し、結果を知るという過程を繰り返していました。しかし、教える立場になるには、その観察・実験の意味を十分に把握する必要があります。意味を知ること、児童の観察・実験への意欲を喚起し、理科への興味を湧かせることにも繋がると思います。

また、新たな発見もありました。燃焼の実験では、ビンの中の火が消えたことは酸素がなくなったことを意味しているという理解をしていました。しかし、気体検知管でロウソクの燃焼後のビンの中の酸素を測ると18%近くあり、酸素があっても火は消えることに気づかされました。この講座を通して、既習の実験でも違ったやり方を学んだり、新しい発見をしたりしました。講座を通して得た理科指導に必要な知識や技能を更に向上させ、実践力のある教師を目指したいと思います。

私は中学生の頃から理科をとても苦手に感じていました。そのため、授業で行う実験も「俺がやりたい！」と率先して発言する男の子にほとんど任せてしまっていました。実験器具の使い方は分かるのですが実際に使う経験が少なかったため、この観察・実験パフォーマンス講座に対して初めはとても不安を感じていました。

私は小学校教員になりたいのですが、自分自身が理科を苦手に行っているせいで、自分の教える子どもたちが理科を苦手になり、実験に対する不安も軽減しました。私はマッチが上手く擦れないのでアルコールランプやガスバーナーに火をつけるのにも時間がかり、たくさん迷惑をかけてしまいました。しかし、マッチの擦り方から教えていただき3回の観察・実験パフォーマンス講座が終わるころにはマッチも上手に擦れるようになりました。

きっと私と同じように特に理科の実験器具の扱い方に対する不安を感じている方も多いと思いますが、この講座を通して以前よりも実験器具に対する抵抗感が軽減すると思います。教師になるために、とても意義のある講座でした。



学部3年 言語系コース(英語)
三村 茜 さん

アドバイザーのつぶやき

青年の頼もしさ

この授業を担当させていただいて学生以上に私が多くを得ていると感じます。まず、観察、実験を通して、学生の皆さんが学習者として喜びを率直に表出するときは、この事業とそれに係わる自分たちが在る意義を実感した頑張ろうと思います。また、学生の皆さんが回を重ねる内に学習者の視点から授業者、指導者、理科の経営者のそれへと転換していく姿に出会います。目的をもって学ぶ青年の頼もしさを覚えます。

学生の皆さんの寛容な姿勢に助けられることがあります。現象を明快に説明できないときなどは、不明を恥じ、同僚に教えを仰ぎ、自らの学びとしています。

嬉しかった言葉

気体検知管で酸素濃度を測りながら「小学校の時これやりたかったんだけど、じゃあ一人で負けてできなかったんです。一人ずつ実験できるなんていいですね。」と、一人の男子学生が話してくれました。

小学校では、ほとんどがグループ実験です。そのため実験器具には触らず、見ていただけということは珍しくないとされます。「理科は苦手なの」「実験の指導なんて自信がない」「電気ってよく分からない」等々、初めの頃不安そうな声をたくさん耳にしましたが、実験を進めていくうちに、いつしか聞こえなくなりました。自分だけの力で取り組むうちに、不安がなくなったのでしょうか。「苦手だと思っていたけれど、やってみたら意外と楽しかったです。」

ある女子学生からいただいた嬉しい言葉です。

楽しく充実した理科学習に

内容は初歩的な器具の操作や小学校段階の観察実験であるが、実際に自分の手で行ってみることに意義がある。マッチで苦戦したり、ろ過するための紙を折ることができなかつたりしていても、ちよつとしたヒントや練習で次第にできるようになってきている。

また、電流と電圧の測定において、その回路の接続や規則性はともかくとして、「電流、電圧って何？ 見たことある？」「豆電球が明るくなったのだから、何かが減っているはずだよ」と聞くと、途端に困ってしまう。ここまでは要求されていないのであるが、実際に子どもは質問してくる。現象の解釈に科学のおもしろさがある。

「実際に自分で行ったり、いろいろな話をしたりしないと、本当の深まりも新たな疑問も生まれてこないと思った」という学生の声に、この講座のよさがある。

成果(アンケートのデータ)

初等理科指導法の受講生を対象に、実験器具の使用方法や、実験のやり方を小学生に指導する自信があるかどうかを、「観察・実験パフォーマンス講座」の実施前後に質問紙によって調査しました。この調査から、受講前には小学生に教える自信をもてなかった人が多かったものの、受講後には大きく改善していることがわかります。

講座を受講した学生からは以下のような感想が寄せられました。

◎パフォーマンス講座は授業外!と初めすごくビックリしたが、1回1回すごく楽しく(私は小学、中学の時あまり積極的に実験に関わらなかった)とてもためになって有意義で良い時間だったと思った。器具に触ることができて受身にならずとても良かった。

◎元々、理科は嫌いな教科で、正直すごく嫌でした。でも授業で器具を扱ったり、パフォーマンス講座に参加して、その苦手意識が克服できたので、ありがたかったです。ありがとうございました。

アルコールランプ



手回し発電機



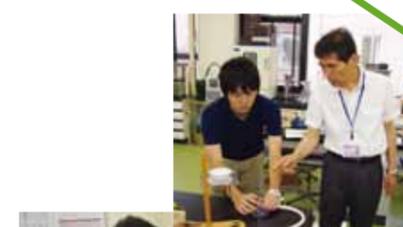
酸素を発生させて集気ビンに集める



池田 定充
国立公立中学校38年間勤務
平成17年3月退職
上越市在住



中澤 利子
公立小学校37年間勤務
平成18年3月退職
上越市在住



榎嶋 誠太郎
国立公立小学校38年間勤務
平成17年3月退職
上越市在住



Juen Collection 2011

オシャレ上教大生11人のコーディネートスペシャル!彼らがリアルに通っているショップや、とっておきのお宝アイテムの紹介もあるから、コーディネートのお手本にしてね!

*名前(学年・コース or クラス)

Q.①趣味 ②好きなブランド・ショップ ③いま狙っている服・小物
今日のファッションのおしゃれポイントは?



Ray-Banのサングラス。なんと、セカストで見つけたそうですよ。

黒岩 瑞樹(2年・国語)
①こけし集め
②HRM
③白シャツ!10枚は欲しい!!



ベイズリー柄のシャツ。タイとカーデで合わせて、OJIコーデ風!

遠山 大紀(1年・A4)
①野球観戦
②FREAK'S STORE
③BIG JOHNのデニムシャツ



原宿で一目惚れしたブローチを、パレットに改造したそうです。

石浦 志帆(4年・美術)
①マンガ。おすすめは「宇宙兄弟」
②ユニクロ好きです
③シャツがいっぱい欲しいです



Sleep one pieceのストール。小竹さんが大好きなYUKIとコラボレーションしています。

小竹 規子(4年・生徒指導)
①手芸・工作
②なし
③華奢なネックレス



Reebokのスニーカー。ビビッドカラーが目を惹きます。

相澤 匡樹(3年・体育)
①読書
②ZUCCa
③ブーツ



ビーズのパレット。アクセやブーツなどの小物使いが、とても上手です!

杉野 瑠依(1年・D2)
①ごろごろすること
②LOWRYS FARM
③小物



新潟の古着屋で買ったパンツ。カラフルなドットがとっても個性的です!

星野 郁馬(3年・数学)
①写真
②BEAMS, SHIPS
③サルエルパンツ



ユニクロで買ったロンTを肩からはおって、アクセントにしています。

平田 旬子(2年・生徒指導)
①プランターで野菜栽培
②A-net系
③LL.Beanのブーツ



編集後記

ファッション雑誌を意識して、ポージング等にもこだわってみました。モデルの皆さんもとても个性的でステキで、楽しく撮影・編集ができました。上越の厳しい寒さをお気に入りの服で元気に乗り越えましょう!

学部4年/社会系コース
植田 かおり
学部4年/言語系コース(国語)
稗島 佑加



エスニック風ストール。ナチュラルなコーデとのバランスがステキ!

内田 由布(1年・A4)
①お洗濯。柔軟剤の香りが好き!
②なし
③柄物のシャツ



「彼女からのプレゼントの時計です。いつもつけてます♡」

竹松 譲(4年・社会)
①勉強、飲酒
②Lounge lizard
③黒のGジャン



原宿のFREAK'S STOREで買った靴。色と素材が秋らしいですね!

岡村 亮汰(2年・体育)
①散歩すること
②TSUMORI CHISATO
③ワークパンツ

附属学校 だより



幼稚園

附属中学校三年生の保育体験

六月、附属中学校三年生が、幼稚園にやってきました。「ブランコ押して」「おにごっこしようよ」いきなりのリクエストに、戸惑いがちだった生徒たち。幼児の目線に立ち、思いを受けながら、汗だくになって遊んでいるうちに、すてきな笑顔があふれてきました。幼児と生徒の間に、何とも言えないやさしい絆が生まれます。



小学校

音楽集会

一年に五回行う音楽集会は、当校の自慢の一つです。音楽集会は、全校児童が集い、一緒に歌を歌ったり、ダンスを踊ったりする活動です。その中でも、「夏の音楽集会」は、一年の中で一番盛り上がりがあります。

昨年はティスコ、今年は阿波踊りを題材として、学級ごとに考え練習した踊りを発表しました。どの学級も学級のカラーが出たパフォーマンスで、大変見応えがありました。また、見ている子どもたちも一緒に踊ったり、掛け声を掛けたりして、全校児童が一体となった音楽集会でした。

思いっきり歌やダンスに取り組み楽しさを味わうことで、自分から進んで表現する力を育んでいます。



附属小学校一年生との交流

入学して一ヶ月後、慣れ親しんだ幼稚園に一年生が遊びにきました。「幼稚園の時できなかった鉄棒ができたよ」と、自分の成長を確かめたり、幼児と一緒にお気に入りの場所を遊んだり、幼稚園での交流を楽しみました。

七月には、五歳クラス児が附属小学校へ招待されました。一年生は幼児の手を握り、優しく案内してくれます。紙芝居を見せてもらったり、飼育している動物と広い校庭で一緒に遊んだり、一年生とのかかわりを深めました。四回行われる交流を通して、五歳クラス児は小学校生活への期待を高めていきます。



中学校

沖繩修学旅行

毎年、三泊四日で修学旅行を実施しています。この修学旅行は、附属中学校伝統の平和学習で、日本で唯一、地上戦が行われた沖縄を訪ねます。

現地では、ひめゆり学徒隊の方から戦争当時の様子を伺ったり、「平和の礎」で平和祈念合唱を行ったりして、一人ひとりが戦争のない平和な世界の実現に向けて、決意を固くします。また、首里城や守礼門などの歴史的な文化財を訪ねたり、グループでシェノーケリングやグラスボートなどの体験活動を行ったりして、見聞と体験を広げます。

幼・小・中の
つながりを大切に





上越市と「ものづくり支援 パートナー協定」を締結

9月13日に上越市と「ものづくり支援パートナー協定」を締結しました。

この協定は、上越市と上教大が相互の特色を尊重し、組織的な連携・協力を推進し、工業振興と産業の発展及び人材育成に寄与し、地域経済の活性化を図り、地域社会に貢献することを目的として締結されました。

はじめに、村山上越市長と若井学長による「ものづくり支援パートナー協定」締結調印式が執り行われ、引き続き「発酵食品によるまちづくり～地域における発酵産業の今後～」と題して、協定締結記念シンポジウムが開催されました。

今後は、教員養成大学の人材育成ノウハウを生かした「ものづくり、ひとづくり、まちづくり」を上越市と推進していきます。



地域と共に 復興支援バスツアー を実施

8月20日と9月3日の両日、東日本大震災の復興支援を目的とした「被災地ボランティア日帰りツアー」に、学生・教職員60名と市民26名が参加しました。

このツアーは、上教大が地域の旅行者と共同で企画したもので、「がんばらなくちゃいけないときもある!」をキャッチフレーズに、深夜零時に大学からバスで出発し、早朝に被災地到着、日中に津波により浸水した農地の再生に向けたボランティア活動を行い、同日深夜に帰ってくるという日帰りツアー。

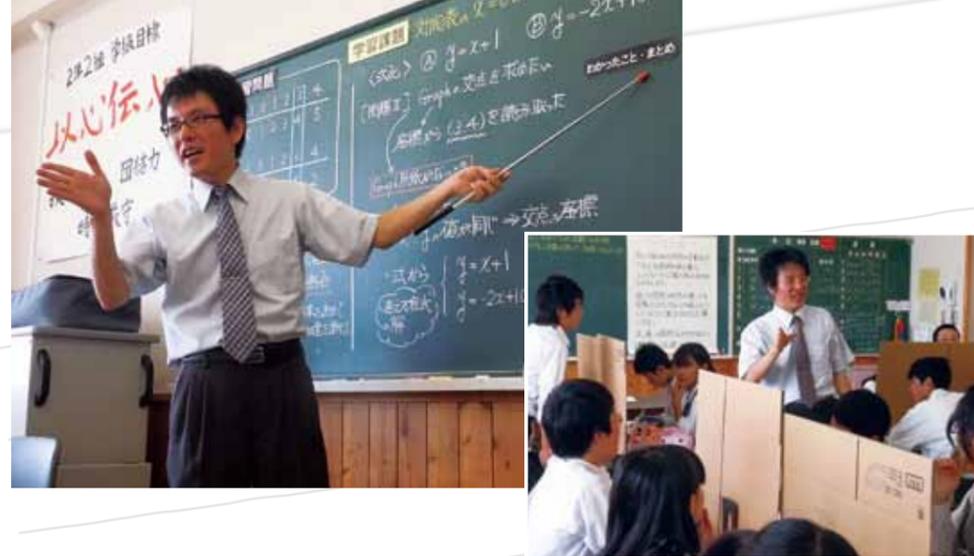
参加者からは「一日の作業で出来ることは少なく、ガレキを取り除いた後も、塩気を帯びた農地を再生し、野菜が育つようになるまでを思うと、復興の道のりの長さを感じるが、私たちが少しでもお手伝いが出来たのなら嬉しい。」などの声が寄せられました。

「早寝早起き朝ごはん」 全国協議会の推進会員に

「早寝早起き朝ごはん」全国協議会が推進している「早寝早起き朝ごはん」国民運動に賛同し、国立大学法人として最初の推進会員となりました。

この運動は、基本的な生活習慣を確立し、子どもたちが豊かで健康な生活を送るために始められたもので、平成18年度に「早寝早起き朝ごはん」全国協議会が設立されています。

本学の今後の取り組みとしては、教員を目指す学部学生・大学院学生への授業科目「食生活論」、「学校と食の教育」、「現代社会と学校教育」や出前講座「情報メディアと生活習慣」、「学校で活用できる食育コンテンツ」による啓発などの事業を行います。また、教員養成大学として、地域貢献も踏まえた幅広い活動を展開していきます。



修了生からの
お便り



日本数学教育学会 研究奨励賞を受賞して

この学校に赴任して半年が経ち、ようやく現場の感覚を取り戻したような気がします。4月当初は生徒から「先生の歳になって大学?」という不思議そうな眼差しで見られている私がいまいました。ところが最近、大学からの教授実驗の依頼に積極的に協力し、授業を幾つか提供してきた経緯から、「大学に行って勉強してみたい」、「大学で資格を取得して将来に役立てたい」という会話が身近で聞かれるようになりました。

私が長野県の大学院派遣教員として希望した理由は2つあります。1つは、教師歴10年という節目を迎え、自分の今を見つめたとき、今までの経験に基づく授業に偏りだしたスタイルに違和感を持ち始めていたことです。もう1つは、学習指導要領改訂に伴い、暗中模索するのではなく、趣旨を確実に理解したうえで、専門性や教材開発力、単元構成力を改めて身に付けていく必要があると感じたことからです。先行実施が始まろうとしている今しかチャンスはないと強く考えていました。

上教大大学院では自然系コース(数学)に所属し、中学校数学に新たに新設される「資料の活用」に焦点を当て2年間研究を推進してきました。その成果として、この度、日本数学教育学会研究奨励賞を受賞することができました。この賞に至るまでの過程は決して平坦ではなく、統計的モデリングの理論を構築する段階で苦悩したり、子どもたちの

内的思考や変容を観察し、捉えていく質的方法の難しさに直面したりして、自分の見方や考え方の未熟さを痛感しました。このような中で、数学コースの専門性豊かな先生方の具体的かつ的確なアドバイスを周囲の院生仲間との協力もあり、論文としてまとめあげることができたことに感謝しています。

現在、勤務する中学校では2学年の学級担任と学年副主任を兼ね、日々生徒たちと共に学校生活を送っています。残念ながら学校現場は、なかなか授業に専念できる余裕がないほど多忙なところで、今の私も仕事で後手に回っている感はありません。その理由は、一人ひとりの生徒の把握や支援(生活記録・休み時間・個人面談)、新しい出来事に対する対応、給食・清掃指導、部活動指導、地域や家庭との連携、学校行事など、どれも教育上大切な仕事で日常的に繰り返して行われているからです。しかし、上教大で学んだ今の私は、限られた時間の中で「子どもの思いや考え方を多面的・多角的に見通す資質と教科を中核とした生かせる知識量」をベースに教材研究を行い、授業実践することができるようになってきました。これも2年間の研究で培った賜物であると確信しています。是非、大学生・院生であるみなさんも上教大という素晴らしい環境の下で粘り強く探究し、自分の学びや教育感を拓いていってほしいと願っています。



下平 将揮
(しもだいら まさき)

長野県出身。長野県大学院派遣教員として平成21年4月から上越教育大学大学院自然系コース(数学)に在籍し、平成23年3月に修了。現在は長野県松本市立鎌田中学校に赴任し、2学年学級担任と学年副主任を担当している。また、校内研究部として学力向上、授業改善を推進している。第67回関東都県算数・数学教育研究松本大会実行委員、松本市教育会教科等研究員(算数・数学)



2年5組の生徒たちと共に



大学院同窓会評議会を開催しました

会員の皆様には、それぞれの地域、それぞれのお立場でご活躍のことと拝察いたします。また、この度の東北地方を中心とした地震と津unamiによる大震災にあわれた会員の皆様には、心よりお見舞い申し上げます。

さて、上越教育大学大学院同窓会に関する活動は、皆様方から入学時に納入していただいた会費によって成り立っています。この会計年度は、6月から新年度が始まります。そこで、5月に理事会を持ち、新年度に入り評議会を開催いたしました。

大学院同窓会には、主に3つの重要な会議があります。大学院同窓会会則第7章「会議」の第16条に「総会」は必要があるときに会長が招集することができ、第17条に「評議会」は本会の重要事項を審議し決定するとあり、第18条に「理事会」は会務の企画を審議し処理するとあります。

5月28日(土)の理事会では、事業報告・会計報告、新年度の事業計画・予算が審議されました。その結果を7月16日(土)の評議会で提案し、審議をいただきました。

評議会を開催した7月16日(土)は、夏の日差しが照りつける非常に暑い日となりましたが、ご多忙にもかかわらず若井学長、佐藤副学長をお迎えして開催することができました。また、各都道府県の同窓会支部から宮城支部、東京支部、埼玉支部、千葉支部、愛知支部の代表の方々が出席されました。震災の影響が懸念されましたが、宮城支部をはじめ

め、支部活動を展開している大半のところから出席いただき、感謝申し上げます。

評議会は、新装された上越市の「直江津学びの交流館」の多目的ホールで開催されました。会長はじめ、理事6名、監事1名、評議員7名、計15名の出席がありました。まず、寺田会長の挨拶があり、若井学長より励ましの言葉をいただき、佐藤副学長より上越教育大学の近況についてお話がありました。また、出席された各支部の活動状況についても、自己紹介を兼ねて行っていただきました。

その後、平成22年度の事業報告と会計報告、同監査報告がなされ、報告の通り承認されました。次に、役員について会長より報告がありました。若干、在学中の各専攻コースの評議員が選出されていないところもあり、支部の拡大も含めて課題とされました。

次に、平成23年度の事業計画案と予算案のなかで、上越教育大学の40周年に向けて、記念事業を行うことができるように積み立てをすることが提案され、承認されました。

評議会終了後、若井学長、戸北理事、佐藤副学長にもご参加いただき、遠くからご参加いただいた支部の方々と懇親のひとときをもつことができました。在学中の昔を思いだし、学校現場の諸問題について意見を交わし、今後の上越教育大学と同窓会について語る事ができた貴重な機会となりました。

大学院同窓会事務局長
臨床・健康教育学系 教授 齋藤 一雄

上越教育大学大学院同窓会事務局へのお問い合わせ先
E-mail:dousoukai@juen.ac.jp

大学院同窓会ホームページ
http://www.alumni.juen.ac.jp/



「実りの秋」とか、もっと直截な表現として「収穫の秋」という表現もよく使われる秋です。皆さんはどんな気持ちで、この頃(深まりゆく晩秋の候)を送っているでしょうか。達成または実践すべき課題や目標を明確に意識して、一日一日を完全燃焼の状態ですべて送っているのであれば、申し分ないのですが、「何となく一日が過ぎていく」、「やらなければならない」の状態、自分ながら不甲斐無く思うようであれば、「自己変革」(self-challenge または self-innovation)に挑戦してみよう！自分に言い聞かせる実践スローガンは、表題の都々逸(どどいつ)です。毎朝、1、2回、声にして静かに口ずさんでみましょう。

高田の四季を 楽しく愛でて
心豊かに 思索せよ



実りの秋に 一念発起 できることから 先ず一步

～今が好機だ 迷いの日々を 挑みの旅に ギアチェンジ～

学長 若井 彌一

スタートができればよいのですが、難易度に差があっても、やはり「善を為す」には、ほどほどの努力を必要とします。それで、秋のうちには、とうとう踏み出せなかったという人が出て来るかもしれません。ならば、冬にスタートを。それでも出来なければ、春にスタート、せめて夏にはスタートを！
それでも、自己変革への挑戦が実践(実行)できないでいる自分に気が付いたら、そんな自分を道徳的に責めたりするよりもむしろ、自分を対象化して、観察し、分析し、思索をして、少々まとまりのある自分史(物語)の作成に挑んでみるのも有意義です。
自分は、どのような経過を辿って形成されるに至ったのかを徹底的に科学(省察と哲学)してみてください。そして一寸した思いつきレベルの自分史ではなく、同じような思いで悶々と苦しんでいる人々への福音(人生指南)の一書としてプレゼントしたいとの強い

願いを込めて挑戦することが大切です。今年の秋だけが「実り」の季節ではありません。焦りは無用です。春、夏、冬のどれも実りの季節にすることが可能です。

上越は、幸いなことに、四季の変化が鮮明な気候風土です。春・夏・秋・冬を歌として表現し楽しむことも出来ます。名曲「高田の四季」を超えるような「人の心を打つ歌づくりに挑戦してみるのも粋なチャレンジです。歌づくりだけでなく、小説や芸術作品、更には、日常的な食品から高級嗜好品等々、挑戦する知的生産物の範囲は実に多様です。

そして、上教大が基本的な任務としている人づくり(教育)の多様な施策と実践は、最も難度の高い、知的生産の理論(科学)と実践の総合的挑戦なのです。これらの価値ある知的生産のためには、高度で継続的な「学び」が不可欠です。

豊かな才能を持っていても、自らの継続的努力なしには、「可能性」が「実り」として花咲くことはありません。焦らずに、先ずは、継続できそうなことから第一歩を踏み出しましょう！ It is not too late to do good deeds. そして、時には辛いときのために、次の歌(合言葉)を皆さんに贈ります。

早く咲く花 遅く咲く花
それでいいのだ 人生は

「教育の道」を志す若者よ、春日山の麓、上教大で鍛えよう！

この拙文が、本学の在学生だけでなく、本学入試を目標に健闘している日本全国の高校生の皆さんの励みになることがあれば、望外の喜びであります。